

寒くなったころの「墓地」

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで



針葉樹と広葉樹が混ざっている秋の林(上士幌町糠平湖畔)。深緑が針葉樹。4,000年前ころから寒くなり、平野でも針葉樹が増えた。

4,000年前ころから、だんだんと寒くなっていきました。世界に氷河が増え始め、海の水が減り、陸地が少し広がります(海退という)。

十勝の丘では、ドングリの木(ミズナラとカシワ)やイタヤカエデが少し減りました。かわりに、トドマツやエゾマツなどの針葉樹と、シラカンバ(シラカバ)が増えていきます。

湿地では、こおった土が部分的にもり上がり、とけて周りがけずられる、というくり返しの中で、「十勝坊主(p84)」という、もり上がりのある地面ができました(帯広市の帯広畜産大学農場・更別村の上更別湿原[p63]・音更町の東音更など)

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



上利別20遺跡の土器。(写真:足寄町教育委員会蔵)



池田3遺跡の動物形土製品。(写真:池田町教育委員会蔵)



上利別20遺跡の位置。足寄町鷹府。

石が集められた墓

およそ3,000年前、利別川の支流、足寄町ベラボナイ川ぞいの段丘の上に墓が作られていました(上利別20遺跡)。

そのひとつには、ベラボナイ川の石(20~40cm)が262個も集められています。特別な人の墓だったのでしょうか?

この遺跡では「きゆうす」のような注ぎ口のついた土器、土でできた耳かざりや腕輪(p99)「うるしぬり」がされたクシ(?)などが見つかっています。

同じころ、池田町の利別川近くでは、土でキノコの形やモモンガのような動物の形のもの、あるいはスタンプが作られていました(池田3遺跡:p98)。

十勝川をはさんだ丘の墓

およそ2,500年前、十勝川の本流ぞいにある丘の上(音更町宝来)と、十勝川や札内川をはさんだ対岸で、札内川と途別川の間にある丘の上(幕別町依田)に、墓が作られています(相生1遺跡と札内N遺跡)。

相生1遺跡の墓には、土器がスッポリと入れられ、焼けたイノシシやワシ、魚の骨が混ざった土でうめられたものもありました。また、墓の周りには火をたいたあとがあります。亡くなった人を送る儀式が、おこなわれていたのかも知れません。



相生1遺跡と札内N遺跡の位置。



相生1遺跡(音更町)で見つかった、スッポリとうめられた土器。右はこれを復元したものの。(写真:復元土器:音更町郷土資料室蔵:2)

1 イノシシ:イノシシは北海道には生息していない。しかし、縄文時代も終わりごろになると、北海道内各地の遺跡からイノシシの骨やキバが見つかるようになる。飼われていた、という説と、骨付きの肉が持ちこまれたのだ、という説がある。

2 音更町郷土資料室(おとふけちょうきょうどしりょうしつ):音更町希望が丘1番地(農村環境改善センター内)電話 0155-42-4099

今は消えた遺跡の丘 ... 札内N遺跡

「札内N遺跡（幕別町）」は、札内川の東にある段丘の上面（上札内I面・上札内IIa面〔p54〕）にあります。かつては、札内川の本・支流や十勝川の支流が流れる氾濫原を見下ろす場所でした。

この丘をくずして、家や道路をつくるための土や砂利をとることが決まり、その工事前に発掘調査がおこなわれました（平成5～10年〔1993～98〕）。発掘調査では、およそ2,500年前の墓が141カ所見つかりました。

焼いた土でうめられた墓、石でうめられた墓、黒曜石のかけらがたくさん入った土でうめられた墓など、いろいろなタイプがあり、土偶やたくさん

の土器が入れた墓もありました。この遺跡の近くにある「札内K遺跡」からも8基の墓が見つかり、十勝川と札内川を見下ろす札内の丘全体が、当時、「神聖な場所（墓域）」とされていたようです。

調査のあと工事が進められ、遺跡のあった丘はかなり消えてしまいました。



札内N遺跡（幕別町）で見つかった墓。くぼみのある石を集めて、壁ぎわにならべてある。（写真：幕別町教育委員会蔵）



札内N遺跡と札内K遺跡の位置。幕別町字依田。



札内N・K遺跡の方から見た札内の住宅地。かつては氾濫原だった。遠くに見える丘に相生1遺跡がある。

大きな墓にはだれがねむっていたのだろう？ ... 観察のポイント



大きな石がたくさんあった。墓をつくるための石が集められていたのか？（写真：幕別町教育委員会蔵）



札内N遺跡で見つかった土器。今も同じ丘に墓がつくられている。札内新墓地。（写真：幕別町教育委員会蔵）



大きな石がたくさん集められた場所

札内N遺跡には、10m以上の大きさがある穴があり、そこからは、1～2mあるような石がたくさん見つかりました。

いろいろな形をした土器も

札内N遺跡では、「鉢」や「つぼ」、「コップ」や「皿」の形をした土器や、「舟」のような形をした土器が見つかりました。表面には、細かい縄文（縄をころがしてつけるもよう）が全体につけられ、そこに、細かい線や丸い穴といったもようがつけられ、粘土がはりつけられてもいます。

幕別町ふるさと館で見ることができます。

今も墓地がある

札内N遺跡や札内K遺跡のあった丘には、今「札内新墓地」や「札内墓地」があり、東側の斜面には札内神社があります。数千年をこえて、現代人にも通じる「何か」があるのかも知れません。

3 氾濫原（はんらんげん）：川の近くであり、川が氾濫する（あふれる）と水につかる低い平地。（p46）

4 幕別町ふるさと館（まくべつちょうふるさとかん）：幕別町依田384-3（依田公園横）電話 0155-56-3117 月・火曜日休館

寒くなったころの生活のあと ... とくに少なくなる家の遺跡

寒くなってきた4,000年前ころから、遺跡の数、とくに家のあとがめっきり減ります。一方で、墓のあととはたくさん見つかっています。

このころには、十勝だけでなく日本列島東部全体で遺跡の数が少なくなっています。やはり、寒くなったことが理由のようです。

ただ、墓はつくるけれど近くに人は住んでいない、ということはあまり考えられません。

それまでの遺跡があった「川を見下ろす丘のへり」ではなく、もう少し低い「斜面の途中」や「川に近い場所」で暮らすようになったのかも知れません。

池田町の「池田3遺跡」は、もともとの十勝川と利別川の合流点近く、今の利別川の堤防から見下ろすことのできる、清見二線川ぞいの低い場所にあります。



(上)利別川上空から見た発掘している時の池田3遺跡。(写真:池田町教育委員会蔵)



(右)池田3遺跡の位置。池田町字西2条3丁目。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

縄文時代の墓 ... 体をおり曲げる



縄文時代の埋葬のようす(小林遺跡の墓をもとにしている)。(イラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 3)



いろいろなものが入られていた墓。ここでも赤い顔料(ベンガラ:右写真)が見つかる。(大正8遺跡:帯広市)(写真:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

縄文時代の墓は、多くが地面に穴をほって亡きがらうめたものです(土壙墓という)。屈葬といって、亡きがらが、ひざをかかえるような形におり曲げられています。

副葬品として、石器などがいっしょにうめられることもよくあり、小林遺跡(芽室町: p95)の墓からは、Cの形をした耳かざり(塊状耳かざり)が見つかっています。また、この墓からはベンガラという赤い顔料が見つかっていて、墓穴の底が赤くぬらされていたようです。

また、そのほかの遺跡からは、石でうめられたもの、焼かれた土でうめられたもの、黒曜石のかけらがいっぱい入った土でうめられたもの、石器がたくさん入れられたもの、石器がたくさん入れられたもの、なにも入れられていないもの、など、さまざまなタイプの墓が見つかっています。

決まった場所に墓がいくつも作られるようになるのは、およそ6,000年前からのことです。小林遺跡では6つの墓

が集中していました。また、札内N遺跡(幕別町: p97)では、およそ2,500年前の墓が100以上集中してつくられていました。

相生1遺跡(音更町: p96)で見つかった墓では、埋葬の時にイノシシ・ワシ・魚を焼き、その焼けた骨といっしょに土でうめる、ということがおこなわれていたようです。このことは、埋葬する時に儀式(葬儀・葬式)がおこなわれたことを想像させます。

1 もともとの十勝川(もともとのとかちがわ): 統内新水路(とうないしんすいり)完成の昭和12年(1937)まで、十勝川は今のオシタツ川下流部を流れていて、利別川は池田町利別南町で合流していた。(統内新水路 p190)

2 副葬品(ふくそうひん): 亡きがらといっしょに墓に入れられるもの。

3 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひやくねんきねんかんまいざうぶんかざいセンター): 帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

縄文ファッション ... さまざまなかざり

縄文時代の服

縄文時代の遺跡からは、ぬい針や糸、せんに製品などが見つかっています(十勝では見つかりませんが、くさって土にかえたのでしょう)。

縄文の人々は、植物のせんにを編んだ「布」や動物の毛皮などで服を作っていたようです。

縄文時代のアクセサリー(装身具)

旧石器時代(15,000年くらい前)には、すでに、かんらん石やコハクのビーズ玉が作られていました(知内町の湯の里遺跡など)。そして、縄文時代には、今あるほとんどの装身具が(材料はちがうが)作られるようになりました。

ヘアピン・くし・ヘアバンド・耳かざり・ペンダント・ネックレス・プレスレット・腰かざりなどなど。最近も流行しているタトゥー(入れ墨)やボディペインティングもおこなわれていたようです。

こうしたものは、ただ身をかざるためだけのファッションではなく、まじないの道具だったり、悪霊から身を守る意味があったり、また、自分をりっぱに見せるためだったのかも知れません。

ただ、見方によれば、身をかざって美しく・かっこよく見せたり、恋人同士がおそろいのネックレスや指輪をつけたりする「ファッション」は、人の心をあやつる「まじない」のひとつなのではないでしょうか?

十勝縄文の装身具 1

八千代遺跡(p90)や暁遺跡(p79)(帯広市)では、およそ8,000年前のビーズ玉(かんらん石、蛇紋岩)やペンダント(コハク、泥岩)が見つかります。これらのかんらん石やコハクは、大陸から持ちこまれたものではないか、と考えられています。

八千代遺跡では、親指の頭くらいのメノウを戸蔭別川から拾ってきて、穴を開けかけたものが見つかります。いっしょに穴あけ用のキリ(石器)も見つかっていて、何かの事情で作業を中断したようです。

6,000年くらい前には、小林遺跡(芽室町: p95)で、Cの形をした「状耳かざり」が使われていました。墓に埋葬された人の、頭の近くに置かれていたようです(左ページ)。

同じタイプの耳かざりが、大陸の東アジア一帯に広がっていました。十勝では、ほかに十勝川温泉1遺跡

(音更町: p94)でも見つかりしています。

十勝で見つかったものですが、材料は遠い場所で産出した蛇紋岩であること、また、とてもいい作りであることから、多くは遠くの場所で専門的な「職人たち」の手によって作られたものだと思います。

5,000年くらい前に道央から道東北部で使われていたヒスイ玉は、新潟県の糸魚川産のヒスイで作られていることが、蛍光X線分析という方法で確かめられています。



(左)腕輪と滑車状耳かざり(上利別20遺跡:足寄町)。 (右)八千代遺跡(帯広市)で見つかった玉やペンダント。

十勝縄文の装身具 2

縄文時代が終わりに近づくと、北海道東北部を中心に、コハク玉が大量に副葬されている墓が見つかります。十勝でも池田3遺跡につくられていた墓から、いろいろな形をしたコハク玉が141個見つかりました。

これらのコハクは、サハリン産ではないかといわれています。

上利別20遺跡(p96)の3,000年前ころの墓からは、土を焼いて作られた滑車のような形をした耳かざりやうるしぬりのクシ(のようなもの)が見つかり、さらに、もう少し新しい時期の腕輪(プレスレット:土製)も見つかりしています。

縄文ファッションは世界をつなぐ

このように身をかざる文化は、とても長い歴史を持っています。

そして、装身具を調べることで、縄文時代には北海道と本州、あるいは大陸との間に、広く交流があったことがわかります。石器や土器とともに、縄文ファッションも世界をつないでいたのです。



縄文ファッション

左上から、耳かざり、ネックレス、プレスレット(腕輪)。
右上から、クシ、ヘアピン、ペンダント、貝のプレスレット。

(写真左:足寄町教育委員会蔵、写真右とイラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵)

4 かんらん石(かんらんせき):鉱物(こうぶつ)の一つ。固く、オリーブのような緑色。透明で割れ目の少ないものは宝石(ペリドット)とされる。
5 コハク(琥珀):木の樹脂(じゅし)が地中にうまり、長い年月をかけて固まった宝石。

6 蛇紋岩(じゃもんがん):かんらん岩(かんらん石を多く含む岩石)が水と反応してできる岩石。表面に蛇(ヘビ)のような模様が見られることから名づけられた。
7 泥岩(でいがん):泥が海底や湖底などにたまり、固まった岩石(堆積岩p28)。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん